



解題

アシュラムとはインドの言葉で「退修」という意味で、スタンレー・ジョーンズ博士によって日本に紹介されたものであります。折りの生活をもって前に自らを整え、今日に於ける主のご委託にこたえんというのがその願いです。

2024. 3月第664号

発行所 アシュラムセンター
523-0894 近江八幡市中村町 567-2
Tel 0748-33-4030
Fax 0748-33-8856

アシュラムセンターホームページ
www.ashramcenter.jp

編集 アシュラム誌編集委員会

振替 01050-6-53772
アシュラムセンター

印刷 明文舎印刷商事(株)

マルコによる福音書は、主の復活の出来事を唐突に終わらせる。多くの神学者は、16章の9節から20節は、後に付け加えられたものとする。もちろんそれを定説だと単純に肯定するものではないけれど、私は、白い長い衣を着た謎の若者が突然現れ、「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない」(マルコ16:6)と告げられ、女たちは震え上がり、正気を失い、逃げ去った、と話が終わったとしてもおかしくはないと思う。ましてや「あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれた。かねて言われていたとおり、そこでお目にかかれる」(マルコ16:7)と、弟子たちやペテロに伝えよと言われても、恐ろしくて何も言えなかったことの方が、真実に近いような気がする。

しかし、この彼女たちが、恐ろしくて、口に出すことさえできなかった死者の復活が、今や全世界の人の知るところとなったことは、決して終わることのない驚くべきことなのだ。注釈者は、絶妙の表現でこう書く。「十字架刑が物語の終わりのようであったが、しかしそうではなかった。復活もまた、本当には物語の終わりではない。(中略)マルコの終わりは終わ

瞑想

驚くことはない。十字架につけられたナザレのイエスを捜しているのだろうが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。

マルコ 16:6 (協会訳)

主幹牧師 榎本 恵

りではない。読者だけが終わりをもたらすことができる」(L・ウィリアムソン『現代聖書註解』より)と。マルコは、唐突に主の復活の物語を、ホラーとして語り終えたのではない。それは、私たち全てに、「あなたたちはどこに主を見つけようとしているのか」と問いかけ

て来るのだ。その場所は、大きな石で閉ざされた、暗いおどろおどろしい墓なのか。そうではない。そこは、また全ての道が上っていく政治、経済、宗教の中心地エルサレムの都なのか。そうではない。そこはまさに「わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤ

ものが出ようか」(ヨハネ1:46)と人々から蔑まれた、異邦人の地、そこなのだ。けれども、そこにこそ生ける復活の主が待っており、あなたはどこで、主と出会うのか。今から119年前、アメリカから、この近江八幡へ宣教師として降り立った一人の青年がいた。小さく暗い駅舎に降り立った彼は、その日の印象を日記にこう記している。「独り、寒く、悩み多し、ホームシック、なのにここにいます。これが後に、建築家として、実業家として、また教育者として「神の国」の実現にその一生を捧げたウィリアム・メレル・ヴォーリズ、その人である。彼は、琵琶湖をガリラヤ湖に見立て、宣教船「ガリラヤ丸」を造り、湖を西へ東へ伝道した。近江八幡を愛し、こここそが世界の中心だと言いつつヴォーリズこそ、まさにエルサレムではなく、ガリラヤで待つておられた復活の主に出会ったに違いない。友よ、私たちもガリラヤへと急ごうよ。

第49回年頭アシュラム感謝

榎本恵

何事も愛をもって

行いなさい。

Iコリント16:14

イエスは主なり。

2024年、第49回
年頭アシュラムにご参
加、またお祈りくださ
り感謝いたします。

まず最初に、元旦に
起こりました「令和6
年能登半島地震」の被
災者の方々の上に、主
の上からの慰めと癒し
がありますように。ま
た、私たちが、その愛
を行う者として、祈り
を合わせていきますよ
うに。

今回のアシュラムで
は、大雪の中、全員が
集うことができました
ことを、まず主に感謝
いたします。と同時
に、誰一人心配はして

も、キャンセルされな
かったことに、それぞ
れの方のアシュラムに
対する篤い思いを感じ
させていただきまし
た。これから始まる、
一年も何が起こるかわ
かりません。しかし、
たとえ何が起こったと
しても、主は、必ず全
てを恵みに変えてくだ
さると信じます。もち
ろん、そのことを理解
するには時間がかかり
はしますが、これは真
実です。悲しみを喜び
にかえ、棘を誇りと
し、弱さの中に強さの
あること、これこそ
が、私たちキリスト者
の真実です。どうか、
これからも共に祈って
参りましょう。

2月5日より、2月
29日まで、ブラジルへ
の伝道の旅に出かけま
す。どうか、覚えてお

祈りください。

来年はいよいよ、50
回目の年頭アシュラ
ム、そしてアシュラム
センター開設50年の節
目の年を迎えようとし

ております、どうか、

このことも覚え、日々
の祈りの中にお加えく
ださい。

(アシュラムセンター
主幹牧師)

第49回年頭アシュラム奨励棘の功名

(続きはYouTubeへ！)

島 隆三

今日読んでいただ
いたコリントの第2の手
紙は、三人称で語って
いますが、パウロが自
分の経験を語っている
と思います。

怪我の功名という言
葉がありますが、ちよつ
と韻を踏んで、棘の功
名、棘の恵みと言った
方がいいかもしれませ
ん。神様から与えられ
たその棘、人生の棘、
パウロはここで自分に
与えられた棘が何であ
るかというところは具
体的には言っていない
は皆さんも体験がある

でしょうけど本当にチ
クチクチクチクとし
て、しかも小さいから
取るのも大変です。で
も取らないことには収
まらないんです。ピン
セットとかで何とか取
るわけですが、パウロ
の場合は取ることで
きない棘でした。必死
になつてこの棘を取っ
てくださいますと神様
に祈ったけれども、その
棘を抜き取るものでは
なくて、私の恵みはあ
なたに十分だと、神の
力は弱さの中で十分に
発揮される。それが神
様の答えだったんです
ね。

棘がなければどんな
に自由に楽しく伝道で
きたらうとパウロは
思ったに相違ないです
が、その棘を抱えなが
ら、しかし、折々その
ときそのときに必要
な力を神様からいただ
いた奇跡の生涯でした。
2000年のキリスト
教の歴史で、伝道者あ



るいはクリスチャンを一人選ぶとすると私は躊躇することなくパウロを挙げます。パウロ先生は、そういうふうな人として神様に用いられたわけですね。私はパウロ先生に追いつかないしがない牧師ですが、それでも50年間5つの教会に仕えさせていただきました。80になる年に神様に教会の責任を解いていただき、今は東京聖書学校という多分日本一小さい神学校に長く関わることが許されて、そこに席を置きながら妻と二人でのんびりと暮らしております。前に教会していた西川口教会から歩いて5分というところに住んでいます。本当に教会が近いことですね。信徒の方が多いです。1時間も2時間もかけて教会に来るのは本当は頭が下がります。私は本当に教会に近いお



かげで礼拝と祈祷会は休まずに出席しております。オリブの里アシュラムの金田佐久子師は、私が西川口教会の牧師だった時に献身して牧師になった姉妹です。

一期一会という言葉があります。主が許してくださればまたここに来たいと思うけれども来られないかもしれないし明日どうなるかわからないので、一期一会のつもりで信仰的自己紹介を皆様に申し上げるのがいいかなと考えて参りました。：

(東京聖書学校)

みもとに...



福岡 時彦兄

(日基 今治教会)

父、榎本保郎が今治教会で牧会させていた頃、教会の青年会の中心として、また聖歌隊の指揮者として寡黙ではあったが誠実にご奉仕しておられた。当時高校生だった私は、この方によって初めて讃美歌のハーモニーの美しさ、主を賛美することの喜びを覚えていただいた。また、洗礼式の直後にいつも独唱して下さった「主よ終わりで仕えまつらん」(讃美歌338番)の美しいテノールを思い出すとともに、本当にこの歌詞のような生き方だったと思う。



父が召されてからの母のアシュラムセンターでの働きをいつも励まし、母が召されるまで祈り支えて下さっていた。感謝。



2024年1月20日召天



加々美 要師

(単立 桶川聖書教会)

1月17日、単立桶川聖書教会の加々美要牧師が、天に召されました。長年、アシュラムセンターの常任運営委員を務めていただきました。京浜アシュラム、教職アシュラムなど、先生のご指導を受け、進められてきたことを、心より感謝申し上げます。残されたご夫人、またご遺族、関係者の皆様の上に、主の慰めを祈ります。



2024年1月17日召天



94歳の誕生日感謝のお祈り

後宮 松代

天の神様、今日この良き日に私のような者の誕生日を迎えることができ、皆さんと共に讃美歌を歌ってお祈りをする良き時を与えてくださってありがとうございます。どうぞこの菩提寺にいよいよ神様の豊かな輝きがありますように。お住まいされているお一人お一人の上に大いなる祝福を与えてください。毎週礼拝が守られることは本当に感謝です。お互いに助け合って神様の国を求めて生かされて参りましょ。ありがとうございます。

甲西伝道所主日礼拝にて



←松代姉直筆「神の愛」

主幹牧師の2023年度の振り返りと
2024年ビジョン(1)

主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人々は立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。

ルカ7:13-14

神様が苦しみをくださり、喜びをくださり、それらはずっと織りなされてきたのです。そしてその苦しみの日も、喜びの日も必ず、私のそばには聖書の言葉がありました。

私の織っている絨毯の裏側はどのような模様となっているでしょうか。あの時、涙を流しながら織った暗い色の糸を神様が美しい金色の模様としてくださった、私はそう信じています。

榎本和子著

『いろいろな女房』より

2023年度の振り返り

1. 母を失うこと

昨年の8月15日、私たちは、アシラムセンター主幹榎本和子姉を、天へと見送りました。96年のその生涯を、まさに主に従い通した彼女の人生は、我が母のことながら、見事と言うものでした。胆管がんと診断され、抗がん剤も、手術も、延命治療は行わないと言う判断のもと、約8ヶ月の自宅での療養生活でしたが、最期まで意識もしっかりとし、眼光鋭く、センターの働きを見守り続けてくれました。召される前日、孫やひ孫たちが枕辺に集う中、一昨年生まれたばかり息子空の3女「浮（うき）」の手を取り、「浮ちゃんか」と言ったのが、最期の言葉となりました。前の晩、急に吐血し、そのまま息をすのるのも苦しそうになっていた母が、その最後の力を振

り絞って発した言葉が、命のバトンが繋がるような、そんな印象的なものとして今も私の心に残っています。「ハレルヤ」と叫びつつ天に召された方もおられるでしょう。また居並ぶ家族を前にして感謝の言葉を述べ、大往生を果たした人もおられるでしょう。しかし、私には、この「うきちゃんか」と、喜びと共に安堵した表情の母の言葉が、愛おしく思えるのです。まるで、復活の主とマグダラのマリアが再会した時の、「マリア」「ラボニ」というあの呼びかけを思い起こさせてくれたからです。

榎本和子姉の生涯は決して楽々の道をのんびりと歩んだというものではない事は、誰もが認めることです。それは、『いろいろな女房』という題名で、母自身が記している通りでしょう。「幼い頃から苦労しい苦労もしないで成長した私でしたが、運命の人、榎本保郎と出会い幾多の困難や苦しみの山坂を越えてきました。しかし、この人さえてくれれば心配ないと思っていた、猪突猛進型の

保郎は、火の玉のようになって主に仕え、病に冒され52歳という短い命でこの世での働きを閉じました。

保郎亡き後不安の中にいた私と3人の子どもが残され、それに加え、主人が命懸けで始めたアシラム運動の継続が心に重くのしかかり、この苦しみから逃れたいと思った」と本の中には赤裸々に、その気持ち綴られています。しかし、そんな彼女を立ち上げさせたのは、神のみ声でした。「なんと幸いなことでしょう。あなたの家に住む人たちは。彼らはいつも、あなたをほめたたえています」（詩84:4）。このみ言葉に励まされて、1977年、創設わずか2年後に、主幹牧師を失うという大変な状況のアシラムセンターの主事として働き始めるのでした。なんの資格も、実績もないただの主婦であった彼女は、まさに主のみ言葉によって「目を覚まし、信仰に基づいてしっかりと立ち、雄々しく強く生き、何事も愛によって行う」（Iコリント16:13）ものと変えられていったのです。

そんな母のことを思う時、私自身の記憶がよみがえってくるのです。かつて遠く沖縄の地に移り住み、牧師になることを拒否し、もう誰もが、私がアシラムに帰ってくるなど諦めてしまったとき、それでも母は祈り続けてくれたのです。それはまさにナインの寡婦が死んで棺桶に入っている息子を思い涙するようなものであったのです。しかし、この母親の悲しみを主は見られ、憐れに思い、その息子を起きあがらせたのでした。聖書は、「イエスは息子をその母にお返しになった」（ルカ7:14）と書きます。「お返しになった」とはまさにこの私のことでした。主の憐れみと慈愛に満ちた言葉、これこそが私の福音であり、母への感謝の思いに他ありません。

アシラムセンターは今、最初の頃の先達たちを次々に天へと見送る、そんな時を迎えています。火の玉のような信仰者も、み言葉聴従に徹した祈りの人も、次々に天の名簿へと移っていくのです。そして私たちは、そんな彼らを失ってい



同志社小学校、シメオン、ラビリンス体験。
西田町教会、中川師と共に。

ブラジルアシュラム感謝



くたびに、心弱くなり、不安と恐れの中で、逃げ出したくなるのです。しかし、それは、私たちだけでは無いのです。その先達たちもまた同じように、心折れ、悩み、呆然としたのです。そして、それはどんな時代の中にあっても、繰り返し繰り返し起こってくる、信仰継承という永遠のテーマなのかもしれません。だからこそ、私たちは残された者として、思い起こさなければならぬのです。私たちの信仰の先輩方が、どのようにこの時を乗り越えてきたかを。私たちが、受け



畑を見て満足する和子母

は、組織でも財産でもなく、この信仰の処し方なのです。2023年、私は大切な「母を失うこと」を経験しました。しかし同時に、その命は、まだ何者でもない幼子の手に、確実に受け継がれていくことを確信した年でもありました。

(続く)

いえじま 雑記9 ついこの間

ついこの間、新年を迎えたと思ったら、もう三月。沖縄ではすでに桜が咲き、暑い夏の足音が確実に近づいてきています。時は待たなして、瞬く間に過ぎてゆくようです。

長女はこの春で小学生になります。にわかには信じられません。ノースカロライナでのんびり育った彼女も、今や二人の妹のお姉ちゃん。しかもその二人はなかなかの曲者ですから、苦労と喧嘩は絶えないでしょう。最近、寝る前も、隣で大騒ぎしたり、大泣きしたりしている二人に「うるさい！寝られない！」という大怒りの声が聞こえない日はありません。誕生日には一人で寝るためのベッドが欲しいようです。それでも可愛いのが妹たち。次女は覚えてたての歌を暗がりでも歌います。しゅわれをアイス。しゅはつよければ。われをよわくても。おそれはアラジン。わーがしゅ、イエツツツツスウー、わーがしゅ、イエツツツツスウー、わーがしゅ、イエツツツツスウー、われをアイスウー。

ヘンテコな歌に、さすがの長女も大笑い。そうして待たなしに夜の時間は進んでいくのです。

榎本 空（ノースカロライナ大学院生、沖縄伊江島在住）

あとがき

今、サンパウロからこの編集後記を書いている。ブラジルアシュラムに参加くださった滝谷牧師夫人から貴重な資料をお預かりした。1975年発刊の「ブラジル自由メソジスト教団設立40周年記念誌」。その巻頭言に保郎牧師の「汝の足からくつを脱げ」と題した文章が載せられている。「神様の恵みは、私たちをいつも越えております。世の中は変わります。人の心は変わっていきます。けれども神の愛は変わりません。これから80年を迎え、100年を迎え、世の終わりまで、私たちの教会は栄えに榮えていくのです」。

今年40年の記念の年を迎えた、ルージャモスの教会アシュラムは、120名に参加者と共に守ることができた。神様は不思議なさる方である。私たちの計画や判断を遥かに越えて、神の業を見せてくださる。来年いよいよ私たちはアシュラムセンター開設50年を迎える。ここは聖なる場所。神にひれ伏し、靴を脱ごう。

(恵)

中止、又はオンラインに変更もあり。
ホームページ、電話等でご確認下さい。
直前の変更の場合あり！

3月の聖書教室など

【主な問い合わせ先】
0748-33-4030
アシュラムセンター

5(火)	ZOOM聖書教室 (Zoom AM10:30、PM7:30)
9(土)	聖書と学ぶ会 (Zoom PM8:00)
16(土)	加古川祈りの家 (小林清子姉宅 PM1:00)
17(日)	ちいしば牧師記念チャペルタ礼拝 (PM5:00)
18(月)	使徒書に学ぶ会 (Zoom AM10:30、PM7:30)
19(火)	大阪聖書教室 (大阪クリスチャンセンター AM10:30)
20(水)	みんなのカフェちいしば聖書入門講座 (京都・伏見区深草 PM1:30)
22(金)	センター聖書教室 (アシュラムセンター AM11:00)
25(月)	静岡聖書教室 (旧・英和女学院宣教師館 AM10:00、PM1:30)
26(火)	東京聖書教室 (御茶ノ水クリスチャンセンター 4F AM10:30)
26(火)	しみじみする会 (桜美林大学 荊冠堂チャペル PM2:30)
27(水)	美しい足の会 (Zoom AM10:30、PM7:30)

3月以降のアシュラム予定

4月29(月)	阪神一日アシュラム
6月	三重アシュラム
6月23日前後	沖縄巡礼の旅

【3月から8月分】Zoom聖書教室新規申し込み受付中!!



齋藤篤師、年頭アシュラムでは、家長。常任運営委員に次期も。今回台湾愛修會ご奉仕の任。
1年間、みことばにて温かな語りかけありがとうございました！



ブラジルの旅、始めは、ルージャモス教会にてアシュラム。写真は、滝谷エミコ姉と感激の出会い！何と、保郎師和子姉を初めてブラジルにお招き下さった牧師夫人。詳細は、後の号で。

台湾愛修會感謝



みことば



日本基督教団仙台宮城野教会牧師
アシュラムセンター協力牧師
齋藤 篤

ボンヤーパー(グアバ)
ブラジルにて

互いに愛し合うならば、それによってあなたがたが私の弟子であることを、皆が知るであろう。

ヨハネによる福音書13章35節

台湾で開催する「台湾愛修会(台湾アシュラム)」へ、ブラジル宣教旅行へ出かけられた恵先生の名代として参加することとなりました。台湾では、最大教派である台湾基督長老教会(PCT)の一部門として、アシュラム運動が盛んに行われているのは、既に皆さんもご存知のことと思います。台湾のエネルギッシュな宣教を可能たらしめているのは、その根底に「御言葉に聴き、祈る」という営みがしっかりと根付いているからだということを、台湾のアシュラムの友との交わりを通して、改めて感じさせられているところです。

ところで、アシュラムという外来語を自国語に当てはめる時に、台湾ならば「漢字」に置き換えて表現するわけですが、私が思わずうなってしまったのは「愛修会」という言葉を当てはめた、そのセンスの良さに対してでした。愛をもって自分自身を修養する会。まさにアシュラムの目指そうとしているその意味を、愛修会という言葉は的確に表現していると私は思ったのです。

観想という言葉があって、自分自身を見つめるということが、最近特に人気があるように思います。それだけ、この世の中がストレスフルな社会なのだろうと思わされます。過剰な情報に振り回され、人間関係に悩みつつ、どうやって明日を生きて行けば良いのだろうか。しかし、観想するときに必要なのは、その土台を何にするかでしょう。

その点、アシュラムは「キリストの愛」を土台に、愛をもって観想し、修養することを何よりも第一としている。そこに大きな魅力があるのだということを、私は自分自身を建てるための心のいしずえにして歩むことができるのを、本当に嬉しく思っています。

この一年間「みことば」を担当して、キリストの愛がますます豊かにされていくことを実感する良い機会になったことを、神に、そしてアシュラムの友の皆さんへ心から感謝いたします。お付き合いくださり、ありがとうございました。

とこしえに
詩篇100:5
榎本和子